
て・ん・せ・いですとー。

橘 充

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

て・ん・せ・いですとー。

【Nコード】

N2030X

【作者名】

橘 充

【あらすじ】

車に轢かれてザッ転生。

1 (前書き)

よろしくおねがいします。

とある夏の日の帰り道のこと。

「あじくどうにかしてくれ、ずっちゃん」

「無理だ。エロ助」

そんな酷い事を返してくる友達の鳩羽祐樹。
通称ずっちゃん。

「何でこの学校プールが無いのかね」

「知るか、バカ」

コイツ殴ってやろうかな。

「家帰ってTSモノの小説読みて」

「俺は漫画が読みたい」

「そーっすか」

ああ。ちなみに俺の名前は桜木裕也。
この歳で145cmのチビだ。

「あゝ何か面白事ねゝかな」

ザッツ転生見たいな？

「黙れ」

ひで。

そんな横断歩道を渡っているときだ。

キー。

ドンッ。

俺轢かれちゃったようです。

???

「起きてーマジで。俺泣いちゃうよー」

五月蠅い。

取りあえず…

「後…5…ふ…ん」

「いや寝るなよ！」

「で。なんすか？」

「わお。急に真面目になるな！」

「五月蠅い。黙れ。用件を話せ。早く死んだなら天国でエンジョイしたい」

そう。トラックに（以下省略。

「それがですね。あなたには転生してもらった事になりました」

「そうなんすか。ってあんた誰なんすか？」

「俺は死神。取り合えずとあるの世界に行ってもらおうか」

「チート満載にしろ。後ドーデもいいから」

「では、勝手に転生まで99、98、9―」「なげえよ」はい。3、

2、1、転生」

2 (後書き)

短くてすんまそん

えー現在。俺、桜木裕也は転生して死神が用意したと思われる家で状況整理をしています。

- ・1人暮らし。
 - ・新しい名前が三月葵。
 - ・TS転生しちゃったもよう。
 - ・現在、原作スタートの2年前。
 - ・頭脳。身体能力上の上。
 - ・どこからとも無く自由にモノが作れる。操れる。
 - ・人の命、性別、容姿以外のモノを自由に操れる。
- 以上。

「チートだな。うん」

見た目が普通に女て…
とほほ。

目の視力が2.0。基本くもりメガネを装備。

「そとあえず今中学生か…」

女らしすぎる容姿にしゃがって。

外見は10人中8人が美少女と言つかんじだ。

髪は腰の辺りまでのロング。

「早速、氷を作成。馬の形に変形」

うまい具合にできちゃいました。

「どすかな」

「取り合えずやっぱ散歩だろ」

現在街中を出て川の土手近くにいます。

(帽子を深く被ってます)

服は男物。

「えー何でしょうこの状況」

目の前にはこっちに向かってくる電撃。

「取り合えず打ち消してみるか」

電気を分解。消す。成功。

飛んできた方角を見ると茶髪の少女。

「あ、あんた何したの」

「打ち消したただけけど？」

「じゃあ、あんた私と勝負しなさい」

「嫌だ。面倒。小学生が何を言う。俺は中三。受験生なんだ」

「そんなこと言わずに私と戦いなさい」

「しゃーなーな。すぐ終わらせてやんよ」

空中からコインを作成。電気をはなつて某超電磁砲。

ちゃんとギリギリでやる。

御坂は口をパクパクしている。

「声が聞こえない。ただの屍のようだ」

「死んでないわよ！あんた何やったの！？」

「電気を使ってコインを凄い速さで飛ばした。ああ今のはわざと外した。これはお前にもできる」

「そーなんだー」

御坂は黒く笑っている。

「そんじゃーな。小学生」

「私は小学生じゃない。御坂美琴って名前があんのよ」

「悪かった御坂。俺は三月、三月葵だ。髪は伸ばしているが男だ。後ちゃんと『さん』をつけなさい」

へーきで嘘をつく。

「分かったわよ葵さん」

「三月にしる。じゃーな」

テレポート。

どーすっかなこの後。

2年後。7月19日

上条のいる高校に進学。

バリバリ偽名で水盛拓也と名のついている。

色々と変装はしている。学校に許可貰って仮面を標準装備。
上条のとなりの部屋。

「たくやん。今日ちよつとゲーセンいかへん？」

「遠慮しておくこの仮面とりてーだけだろ。青ピー」

「たくやんのいけず」

「なんとでも言え。俺女顔だからさ。嫌なんだよ」

「へー初耳や」

「つてな訳でじゃーな」

実際にクレープを食べてみたいのでクレープやに向かう。

並んでいると見事に後ろが御坂。

そしてものすごいプレシャーが！

俺の番になると、

「イチゴと生クリームで」

「少々お待ちください。これ最後の一個です」

ゲコタを手に入れた。

後ろを見ると御坂はうなだれていた。

「えっと…御坂これいる？」

「うん。つてだれ！」

「俺だ。三月だ」

「なんだ三月か」

「だから『さん』を付けるといただろ」

「あの…クレープを…」

「あつ。すみません」

御坂の手にゲコタをおき去る。

仮面を口の辺りまで上げて食べていると、

「そのあなた危ないですよ」

黒子の声とともに火の玉が飛んできた。

それに気がつかず俺に当たる。

仮面が軽さを考えて和紙でできていたため燃える。

そして俺の中の何かが切れた。

「おい、そのお前。打ち殺してやるからそこにいろよ」

コインを作成。

「死にさらせ」

超電磁砲発射。

その方向から「ギャー」とか「たすけてー」とか「お母ーさん」とか聞こえるけど気にはしない。

見事命中。

遅いかもしれないが同じ物を作って顔につける。

クレープ？とつくに燃えたよ。

御坂の出番と涙天のけがをとったけどまあいっか。

「そのあなた何者ですの？お姉さまと同じワザを使うなんて」

「アレは御坂に見せたらパクられただけだ」

「そーでしたの。それにしてもあなた随分かわいらしいお顔じゃないですよ」

「言っておくが俺は男だあんな女顔でも」と言うのは冗談で俺は真正銘男装少女だ。今は水盛拓也と名のっているが本名は三月葵。男として生きてーんだ。じゃーな」

目の前で消える。

これで一応原作ブレイクと。

仮面を外して散歩した後の銭湯帰りのこと……。

青ピーと鉢合わせ。

何故かナンパ……。

「ねえ。ボクとお茶しない？」とべたな感じで……。
どうする俺。

ばらすべきなのか隠しとおすのか！

「どうしたん？体調悪いん？」

よっし。

「ナンパのテクがまだまだだな青ピー」

裏声ではなく素の声で言う。

自分でも女つぽい声だなーと思うぐらい。

「えーと……どちらさん？」

「誰って、水盛拓也だけど？どうした青ピー」

「うつそーん。たakuan男なのに綺麗と思った僕は」

「大丈夫だ青ピー。学校では男装してる女子だから。ってこの胸が見えないのか？」

ちなみに。

「ホントなん？嘘やないん？」

「本当だ。取り合えず、この状態で学校の奴がどれくらいできずくかやってみたいから。言うなよ？」

「オッケーや」

翌日。

俺は女子の制服を着て通常で登校する。

やー。どんくらいできずくかな。

レッツ登校。

名前も元の三月葵にしている。

学校の敷地内に入ると男子がこつちをちらちら見てくる。

おつ。小萌先生発見。小学生と書いて「先生」と読みたいな感じだな。

「小萌せんせい」

取り合えず呼んでみる。

「みぞ、三月ちゃんおはようです」
周りの人がかなり驚いている。

さていつにたったらきずくかな？

5（後書き）

感想をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2030x/>

て・ん・せ・いですとー。

2011年11月17日01時13分発行